【岐阜女子大学】メタデータ項目と記述内容

	メタデータ項目	メタデータ記述欄
1	ID	
2	表題名	与那原の施設
3	資料名	沖縄県営与那原マリーナ
4	内容分類	観光・交通
5	索引語	与那原町　東浜　マリーナ　海　体験施設　山原船
6	説明	■与那原マリーナ 　与那原マリーナは、1991 年に始まった中城湾港マリンタウンプロジェクトをきっかけに整備され、2016 年 8 月 20 日に開港した沖縄本島南部のマリーナである。総面積は 7.1 ヘクタールで、海上に 66 隻、陸上に 226 隻の船を収納可能。 　2018 年には日本最大級のマリーナクレーンを導入し、愛知県常滑市のマリーナりんくうに続き、60 トンと 20 トンの 2 基のクレーンによるツーウェイ方式を採用している。さらに、幅 10 メートルの大型艇が入港できる施設は日本で与那原マリーナだけとされている。 　マリーナでは、2019 年 10 月から「イーストアドベンチャーセーリング」によるセーリング体験も行われており、ヨットの操縦や帆の上げ下げなどを実際に体験できるプログラムが用意されている。その他にも、チャーターボードを貸し切って釣りを楽しむこともでき、釣具のレンタル可能なため、手ぶらで気軽に参加できるのが魅力である。 　隣接地には大型 MICE 施設（国際会議（Meeting)、報奨旅行（Incentive Travel)、国際会議（Convention)、展示会（Exhibition/Event）の頭文字を取った大規模な集客施設群）の建設が予定されており、マリーナを活用した海上交通の発展や観光客の増加が期待されているなど、与那原町の新たな観光拠点として注目を集めている。 参照 YONABARU NAVI, 与那原マリーナ（体験・撮影スッポっと） https://yonabaru.okinawa/spot/activity/yonabaru-marina/　(2025/10/27)
7	形式	静止画（jpg）
8	氏名	撮影者：與那嶺叶
9	時代・年	撮影日：2025/06/29
１０	地域・場所	沖縄県島尻郡与那原町東浜 70 番地
１１	利用条件	表示 4.0 国際（CC BY 4.0）
１２	関連資料	
１３	権利者	岐阜女子大学
１４	協力者	

１５	登録日	2025/11/17
１６	登録者	與那嶺叶
１７	ファクトデータ	
１８	＊特色	■山原船と与那原港の歴史 ①琉球国王時代の国際貿易 　沖縄本島は南北に細長い島で、かつては南部と北部を結ぶ陸上交通が十分に整備されていなかった。そのため、物資の運送は船による海上交通が支流で、山原船はそうした時代に活躍した帆船である。 　与那原港の歴史は山原船が活躍する時代よりもはるか昔にさかのぼる。かつて琉球は、南山・中山・北山の領域に分割されていた。14 世紀半ばには、尚巴志がまだ大里城主であった頃、明国との鉄塊(鉄の塊)の交易がこの与那原の港で行われたと伝えられている。鉄は当時の琉球にとって極めて重要な物資で、農具や工具、武器などの製造に欠かせず、鉄を確保することは王権の力を示すことでもあった。 　1429 年に尚巴志が三山を統一し、琉球王国を建国した。それ以前から、与那原には日本商船が来航していた。1451 年(宝徳三年)、足利義政が将軍であった時代の記録には、「宝徳三年七月、琉球人来る。琉球人献ずるところの島目一千貫、これを禁中に進められる。是れより先、琉球人しばし兵庫の浦に来て交易す。」とあり、日本との交易を盛んに行っていたと思われる。このように、与那原港は、琉球王国時代から国際貿易の重要な拠点であり、中国や日本との交易において重要な役割を果たしてきた。 ②山原船の名称の由来と造船技術 　山原船は、那覇や与那原、平安座、読谷村比謝矼などの中南部と、今帰仁村運天や国頭村奥などの北部の山原地方を往来した交易船であった。木綿帆をかかげた帆船で、戦前まで沖縄本島の海を行き来していた。この船は、フーシン（帆船の意）やマーラン（中国名）とも呼ばれていたが、本島北部の山原地方と頻繁に交易していたことから、中南部の人々が「山原船」という名をつけたのではないかと言われている。 　山原船の造船技術は中国の影響を強く受けており、沖縄に寄港した中国船が原型となっている。特に福州あたりで増幅された進貢船（琉球王国が中国皇帝へ派遣した使者を乗せ、貢ぎ物を運んだ船）を参考に工夫されたといわれている。沖縄では木材ではなく松を多く使用して船を造っていたと記述されている。 ③山原船による貿易と御殿山の枠割 　山原船が運んでいたのは、南部と北部とでそれぞれの地域で生産された物資である。中南部からは米・麦・豆などの穀類や黒糖・塩などの日用雑貨を、山原地方からは木材や薪炭などを運んだ。北部は豊かな森林資源に恵まれていたが穀物の生産が限られており、逆に南部は農業が盛んだったが木材資源

		に乏しかった。山原船は、こうした地域間の需要と供給を結びつける重要な役割を果たしていた。 　与那原には「御殿山（うどぅんやま）」という場所がある。実際に山は存在しない。この名前の由来は、山原（金武）から首里の御殿、つまり王府に納める木材の置場に指定されたことによる。「御殿にさし出す山の木を置く場所」という意味で、御殿山と称したというのが古老の言い伝えである。山原船が与那原港に到着すると、北部から運ばれた木材を陸にあげ、御殿山に集積してから首里の王府へと納入した。与那原は単なる海上交易の拠点だけでなく、王府への物資供給における重要な中継地でもあった。 ③現代の与那原のまちづくり 　現在は東浜地区と言って一部埋め立てを行い、商業施設や住宅街、公園など住民が住みやすい場所となっている。他にも、中城湾港マリンタウンプロジェクトの一環として、MICE 施設が与那原町に建設される。そのため那覇からの交通アクセスをよくするために道路整備や与那原マリーナの開港など、与那原町に訪れる人が楽しめるように計画を立てている。 参照 researchmap，港町として栄えた与那原町の歴史，https://researchmap.jp/read0088222/misc/48764873/attachment_file.pdf　（2025/10/13 閲覧） 比嘉敬，『沖縄大百科事典　上巻』，沖縄タイムス社，1983. 内閣府 沖縄総合事務所局，近代沖縄の道（1879 年～1945）：やんばるロードネット，https://www.dc.ogb.go.jp/hokkoku/yan_koku/03kindai/50.html　（2025/10/22 閲覧）
１９	**＊活用支援**	
２０	**＊利用分野**	教育、生涯学習、地域学習、観光
２１	**＊改善結果**	
２２	**＊処理プロセス**	
２３	**＊関連資料２**	